

博士論文 要旨

鎌倉仏教における無住道暁の思想史的研究 —「方便の多様性」と「思想の統一性」—

東北大学文学研究科

文化科学専攻 日本思想史専攻分野

陳穎傑

本論文は、鎌倉時代に活躍していた無住道暁という僧侶に照明をあて、仏教の周縁世界に生きていた人々に無住が開示してきた救済論を考察するとともに、彼の思想を体系的に把握することによって、鎌倉仏教における無住の重要性とその思想史的意義を究明しようとするものである。

先行研究では、無住を密教僧、あるいは禅僧と見なす論考がある一方、宗派の立場を超えて総合的な視点から『聖財集』を考察した研究も見られる。本論文は後者の総合的視点の方法を継承しつつ、検討対象を無住の代表作である『沙石集』、『聖財集』、『雑談集』に広げて、できるだけ体系的にその思想を解明し、「仏教思想家」としての無住に光を当てようとした。

具体的な方法論としては、「冥顕論」という分析概念における、具体的「顕」と抽象的な「冥」という構図を参考にして、「方便の多様性」と「思想の統一性」という二つの視点から考察を行う。つまり、無住の著作にあらわれる様々な「方便」を確認してから、「方便」が導入される思想的必然性や、「方便」を通して無住が愚かな俗人、仏教初心者にそれぞれ提示してきた救済論を指摘し、そのような救済論を当時の歴史的背景に位置づけることによって、無住の思想に見られる特質と思想史的意義を追究したい。そして、統一的に無住の思想を捉える視点に立って従来の無住に関するイメージを刷新し、「仏教思想家としての無住像」を浮き彫りにすることを目指す。

本論文の考察は、以下の四つの章によって構成されている。

第一章『沙石集』における三学観の展開とその思想史的意義—多彩な「方便」の視点から—では、『沙石集』に記されている方便観と「戒・定・恵」三学の関連性を分析する。『沙石集』では三学が「方便」と「実所」に分けられ、衆生救済に効果のある「方便」に重点が置かれている。かかる特徴を指摘した上で、『沙石集』を通じて三学を凡夫でも修得できるように改良し、劣機に相応しい修行方法として提示する無住の姿勢、とそのような三学観が及ぼした思想史的意義を検討する。

第二章「『沙石集』の救済論—神明の役割と「慈悲」「智恵」—」では、前章で論じてきた三つの方便を参考にしつつ、『沙石集』に登場する神明の役割に注目し、その救済論を考察する。無住は、末法悪世において愚俗を救済するために、当時の仏教家による「易行運動」の弊病を克服し、それに代わって神明による「慈悲」、「智恵」という二段階の救済論を創出したことを論証し、鎌倉仏教におけるその救済論の重要性を提示する。

第三章「中道思想からみた『聖財集』—無住の大乗菩薩観をめぐって」では、本質である「智恵」とともに、そこから具現化してきた作用の「方便」を重視する無住の理解を提示する。その上で、「体用不二」の「中道」思想に遡り得るものであることを指摘する。また「中道」思想に貫かれた『聖財集』が、鎌倉仏教における偏執の問題を克服し、大乗の求道者に「方便為究竟」の真意を理解させるための指南書であることを論証する。最後に『聖財集』を通して、無住が仏教初心者に示した大乗菩薩の姿勢を考察すると同時に、その思想史的意義を解明する。

第四章「「一心」から読み解く無住の思想構造—宗教思想史における位置づけの試み—」では、無住の著書に頻繁に登場し、また大乗仏典によく見られる「一心」というキーワードを通して、彼の思想を体系立てて分析する。諸々の経典を引用し、各宗派の思想と修行方法を博引した無住の著作の特徴は、多面的でありながらも、一つの中枢をめぐって多くの思想と実践が構成され直されたことであり、これは彼の思想を反映したものであることを論証する。そして、このような無住の思想構造を中世の宗教世界に位置づけて、その思想史的意義を明らかにする。

終章では、本論文を「方便の多様性」と「思想の統一性」二つの視点から、無住の思想をまとめる。そして、鎌倉仏教に無住を位置づけ、「仏教思想家としての無住像」を描き出す。最後に、今後の課題を示す。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	陳 穎傑
論文審査担当者	(主査) 教授 片岡龍 教授 佐倉由泰 准教授 引野亨輔
論文名	鎌倉仏教における無住道暁の思想史的研究 —「方便の多様性」と「思想の統一性」—
<p>本論文は、日本中世仏教史研究の中で周縁的な位置にあった無住道暁の思想を総合的に体系づけることで、鎌倉仏教における無住の「仏教思想家」としての重要性と、その思想史的意義を明らかにしようとしたものである。</p> <p>本論文は、研究課題・先行研究・研究視座を明確に提示した序章、本論に当たる第一章～第四章、本論の分析を貫く骨格を明示した終章、によって構成されている。</p> <p>論者によれば、無住は庶民や仏道初心者に寄り添ってその救済願望に応えようと、積極的に思想と実践の足跡を残してきた思想家であった。その実践とは、多様な「方便」による救済の道の提示であり、その思想とは、多様な「方便」を体系的に統一した救済論である。</p> <p>第一章では、『沙石集』を中心に、そのような無住の「方便」観が検討される。具体的には、日本の神々・和歌・仏性啓発という方便を「三学」（戒・定・慧）と関連づけた思想構造と、その鎌倉仏教の改革運動における実践的意義が分析されている。第二章では、引き続き『沙石集』を中心に、以上の思想構造をさらに救済論として大きく体系化し、神仏のコスモロジーを背景とする独自の救済論として明示し、当時の「易行」運動との関係についても考察を深めている。第三章では、一般に、仏道に志す初心者のための入門書と評される『聖財集』が取り上げられる。論者は、『聖財集』に見られる無住の修証論が「体用不二」の中道思想に貫かれていることを、大乘菩薩観を中心に分析し、鎌倉仏教における「偏執」の弊害克服を企図したものと位置づけている。第四章では、『沙石集』『聖財集』だけでなく『雑談集』も加えて、無住の思想構造全体を、第一～三章よりさらに抽象度を高めて論じている。それは、「一心」を基軸にした諸宗派・諸思想・諸実践包摂の構想と結論づけられている。その構想は、根源への志向という当時の宗教世界の大きな潮流に掉さすものであり、ひいては近世以後の「心神」を基軸にした神儒仏一致思想の幕を開くものであった可能性が指摘される。終章では、「方便の多様性」と「思想の統一性」というキーワードをもとに、本論の内容が明確に総合整理されている。</p> <p>本論文の論旨は一貫して明白であり、無住の「仏教思想」の全体構想とその思想史的意義を大きなスケールで描き出すことに成功している。同時代の『徒然草』などとの共通性の検討、無住の思想と当時の社会状況との関係考察、分析概念のいっそうの洗練など、今後に残された課題もいくつかあるが、無住道暁の思想を総合的に体系づけた本論文の成果が、斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑問の余地がない。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	